

衣装からの変容を明らかにすることを目的とする。それは、単に、形の変化を問うことにとどまらず、深位の層にまで掘り下げ、衣装の変容が精神性の変容の上になつたものであることを明らかにしたいと思う。

2. 当時の美術資料はもちろん、芸術理論、美学、文学、哲学との連関において、服飾美を考えたい。

3. 17C後半の一般にいわれるフランス後期バロック衣装はフリルとバッシルに代表されるが、それはオランダの衣装のバロック的性格を整備しながら、宮廷的優美と儀式性を目指して付加された特質であった。ルイ15世時代の女性衣装は、さらに、洗練された優雅の造型的表現として、さかんに曲線を多用し、ヴェルテュガダンを復活すると共に、文様の上にも東洋的趣味—自然的表現の文様や造花によって新しい美的衣装を意図したのである。それは衣装の芸術化であると共にロマンティックな衣装美の新しいカノンの創造でもあった。そして、それらの傾向を提供した美的土壌として、二つの美学的地盤、合理主義と経験主義美学の集約が見られ、さらに、サロン文化に発生するシークへの精神的志向が指摘されるのである。

B-96 ルイ王朝衣装とその美的土壌

九州学園福岡女短大 塩塚 瑞枝

1. 一般に、ルイ王朝といわれる18C中、ルイ15世時代の女性衣装を中心に、その前時代ルイ14世時代の女性